

幹部候補生学校

卒業式での「祝辞」

火箱 芳文 陸自74

陸上自衛隊では皆様の先輩にあたる元陸上幕僚長で、公益財団法人偕行社の理事を務めています火箱です。本日は、第100期一般幹部候補生（BU）課程の卒業式に当たり、深刺颯爽とした皆さん方に対し、祝辞を述べる機会を得ましたこと大変光栄でかつ嬉しく思います。まずは第100期一般幹部候補生課程の皆さん卒業おめでとうございませう。入校以来約10カ月、候補生教育に情熱を注ぎ、後輩たちを遅く育てて頂いた、藤岡学校長以下学校職員の方々に、心からの慰労と敬意を表したいと思います。

私は偕行社の理事と申しましたが、祝辞を述べる前に皆様にはあまりなじみのない偕行社について紹介致します。「偕行」は「共に軍に加わろう、共に行く」という意味で中国の『詩經』の漢詩の一節から採用されたと聞いています。偕行社は明治10年旧日本陸軍将校の一心同体を目指し、親和・研鑽を目的に会合の場所として東京九

将校の心の府として活動を終戦まで続けてまいりました。終戦により軍は解体され偕行社という組織も廃止、活動も一時中断されましたが、昭和26年に陸軍関係者有志により再発足、同32年には陸軍関係の戦争犠牲者の福祉増進と会員の親睦を目的とする「財団法人」として再建されました。平成13年から主として陸自の元幹部自衛官も正会員に加わり、内閣府所管の「公益財団法人」として、戦没者の慰霊顕彰、自衛隊殉職者の追悼、安全保障等に関する研究と提言、自衛隊に対する協力など、偕行社の伝統を継承しつつ自衛隊に対する応援活動を続けておりました。しかし近年旧陸軍関係者であった会員は高齡化し偕行社の運営は自衛隊元幹部自衛官に引き継がれてきております。今後は陸上自衛隊のための応援団として活動していきたいと思っております。

皆さんには現役の間は偕行社の賛助会員として、退官後は正会員として入会して頂くことをお願い致します。前置きが長くなりましたが皆様はOCS（幹部候補生学校・Officers Candidate School）の卒業という日を迎える門出に当たって先輩OBとしてはなむけの言葉を申し上げたいと思っております。一つ目は「幹部自衛官として軍事的知識は勿論ですが、他の歴史、国際政治などの科学的知識と自らの体験に

もとづく知恵の習得に努めてほしい」ということです。皆様は100期生ですが私は本校55期生であります。私が本校に入校し自衛官としてスタートしたのは1974年でした。じ来2011年8月に退官するまで37年間を振り返って見たいと思います。

入校した当時は前年にベトナム戦争が停戦、一時的なデタントムードがあったものの、世界は米ソの「冷戦」時代の真つただ中にありました。その後世界では一時的なデタントムードはあったものの1980年代からは米ソの激しい軍拡競争の「新冷戦」という時代を迎えることになりました。その後世界は1989年の東西ドイツの統一、1991年のソ連邦の崩壊を迎え、米ソの対立「冷戦」が終了することになりました。

冷戦後の世界は「西側諸国の勝利と米ソ一極の世界が出現し、平和が持続する」との願ひもむなく世界は平和、安定どころか大量破壊兵器の拡散、民族、宗教、資源、領土に起因する対立が激化し地域紛争が生起、そして2001年の米国同時テロ以降米国一極に陰りが見られ、代わって中国の台頭、ソ連に代わってロシアの復活、北朝鮮の核・ミサイルの脅威など急激に不安定、不確実な世界へと変化していきま

われています。

このような世界の情勢の中私は51大綱、07大綱、16大綱、22大綱と4度に亘る防衛計画の大綱を自衛官として経験してまいりました。そして退官後25大綱、30大綱と2度の大綱の改定がありました。いずれの大綱も陸海空自衛隊の防衛力を時代に適合すべく英知を絞って策定しているのは評価しますが、肝腎な陸上自衛隊の防衛力は残念なことに体制枠として07大綱で16万体制に移行して以来18万人を超えることはありませんでした。また装備の近代化は図られています地上戦闘力の骨幹装備である戦車、火砲の両門数は大幅に削減されております。しかしながら自衛隊の任務は防衛出動、治安出動、災害派遣の他に警護出動などの自衛隊法の改正、PKO法・国際緊急援助隊法、周辺事態安全確保法などの成立による海外任務、在外邦人等輸送任務など、法律の整備、改正が進み、自衛隊の任務は平成4年のカンボジアPKO以来増大する一方で課題も多く抱えていました。退官後平成27年の平和安全法制整備法及び国際平和支援法の成立により運用上かなりの改善を見たのは喜ばしい限りですが、まだまだ憲法による制約などがあり課題は依然として残っています。

皆様は卒業後、部隊や学校、司令部

等で勤務することになります。様々な問題に直面し問題解決のため状況判断し、決断しなくてはならない事項が沢山待ち受けています。30大綱、安保法制が整備されたとは言え、陸上防衛力の整備上も運用上も不十分な中で、様々な制約がありますが、この範疇で的確に状況判断し部隊を運用することが求められてきます。歴史学者で有名な山内昌之東大名教授は「將たるもの、才を磨くには複雑な状況と歴史を理解する思考を自分の力で実際に何度も重ねることが必要になる。それによって研ぎ澄まされた第6感のように危機が迫ると自動的に反射するか自然に働く直観力を鍛えることができる」と述べています。私は若い頃ある先輩から教えて頂いた「いくさの匂い」のわかる幹部になれ」とはこのことではと思っております。東日本大震災の際私は東京にいました。激しい揺れにテレビのスイッチを入れたとたん東北で「戦」が起ったと思ひ、全国の部隊に出勤を指示しました。「危機的瞬間においては手続的な方全さより、迅速にして実効性ある決断が優先する」と思ひ陸幕長の「法」を超えてでも、省の対策会議前に全国の部隊に出勤を指示しました。日没までの時間が限られていたからです。大部隊が早く投入できなければそれだけ人命が失われ

る。この時の判断は自衛官になって以来の書物や先人からの教えとしての知識と指揮官、幕僚として部隊勤務してきた己の体験から出た知恵のお陰です。大学や幹部候補生学校で基本的知識は身に付けて卒業すると思ひますが、今後は精進して歴史学者や国際政治学者を超えるほどの知識の取得に努力して頂くことを期待しています。

また知恵の取得はこれからの各部隊での厳しい体験によつて得られるものです。体験、経験の蓄積こそ自身の歴史であり自身の支柱となり得るものです。特に初級幹部の時代先ず自衛官としての技術技能の取得に懸命に取り組んでいただきたい。自衛官は軍事の実務者でありプロです。単なる知識に裏付けられた戦略・戦術眼に支えられた冷静な状況判断力だけならば政治家や学者、文官の方で十分だと思ひます。しかし自衛官は軍事のプロ、運用者として勇敢かつ創造力に富んだ戦略・戦術、作戦能力、時には激情を自制しつつ闘魂に駆られた勇猛心を發揮して最終的には現場で処理する力が求められます。福島第一原発に対し放水の要請がありました。当時放射能の状況は誰にも分りませんでした。今放水しなければ原発はもつと暴走し最悪福島県はおろか日本列島には人が住めなくなるといふ認識を持ち

ました。放水任務をやるのは陸上自衛隊しかない。最後の砦ということを考えリスクはあるが、私の信じる陸上自衛隊の隊員ならば必ずやれると任務を引き受けました。そして実施を命じました。やってくれたのは特別に志願した者ではなく、通常のローテーションに従つて搭乗したパイロットたちでした。この時ほど陸上自衛隊の隊員を誇りに思いその陸上自衛隊に奉職できたことを誇りに思つたことはありません。新渡戸稲造は『自警録』の中で「強き人はよく耐える。よく耐える人を強者という。外見は穏やかにして円満に人と争ふことなきも、一旦ことある時は侵すべからざる力を備えた人を真の武士」と言っています。そのためには猛訓練に耐え個人の体力、氣力に裏打ちされた高い戦闘戦術能力、更には戦術能力の習得が不可欠です。初級幹部の時代にしかできない部隊、学校での研鑽、訓練、厳しい鍛錬に期待いたします。

二つ目は「個人として豊かな人間力を身に付けてほしい」ということです。人間は毎日一見瑣事と見えるような事柄の丹念な積み重ねによつて真の自分の教育は出発します。何でもいいと思ひます。決まった時間に必ずこれはやる。例えば日記をつける。起きてすぐ乾布摩擦をするなど日常の中で毎日を律することが大事です。また如何なる人間も他者との関わりなしに生きていく訳にはいきません。団体生活の自衛隊では特に重要です。それは厄介であつても人の世の原理ともいえます。その厄介さの相克の中でこそ人間は鍛えられその存在の意味と価値を知つていくものです。正に一人は人によつて人となる」のです。皆さんを迎える部隊には上司も居れば同僚、部下になる営内隊員もいます。全隊員全て皆さんの着隊を鶴首して待っています。その中で大いに己を磨いてください。

我が国周辺の安全保障環境は冷戦時代の安定した緊張感とは別次元の緊張や厳しさが増していることを憂いながら、私は2011年8月に自衛隊を退官しました。退官後米中の対立「新新冷戦」の時代を迎え益々我が国を取り巻く安全保障環境は現在、頻発する自然災害を含め今までの最も不確定、不安定の厳しい時代へと進んでいます。

吉田茂は防大1期生に対し「君たちは自衛隊在職中、非難とか誹謗ばかりの一生かもしれない。どうか国家のため忍び耐え頑張つてもらいたい。しっかりと頼むよ」と訓示されました。私たちの時代はこの言葉を糧として懸命に生きてきましたが、陸幕長としての最終コーナードで東日本大震災が生じ、私はこれを「戦」と思ひ国家国民

を身に付けてほしい」ということです。人間は毎日一見瑣事と見えるような事柄の丹念な積み重ねによつて真の自分の教育は出発します。何でもいいと思ひます。決まった時間に必ずこれはやる。例えば日記をつける。起きてすぐ乾布摩擦をするなど日常の中で毎日

を身に付けてほしい」ということです。人間は毎日一見瑣事と見えるような事柄の丹念な積み重ねによつて真の自分の教育は出発します。何でもいいと思ひます。決まった時間に必ずこれはやる。例えば日記をつける。起きてすぐ乾布摩擦をするなど日常の中で毎日

を救うため全力でこれに当たりました。フランスの大統領ドゴールは士官学校の卒業式で「耐える」ということについてこう述べています。「軍職は時代によって評価や地位の変動が激しい職業だ。戦時は適度に評価されるが平時は過度に軽視される。それだけに軍職に就く者は悲惨な戦争を戦う勇気とともに長い平和に耐える勇気が必要になる。平和が続く中、戦争に備え続ける忍耐が必要なのだ」と説いています。

国民が自衛隊のことを時代によってどう評価しようが皆様方のやるべきこととは一つしかありません。備えを万全にし、他国に対し寸分の隙を見せない「真の抑止力」となる部隊の育成に全力を傾けておくことです。自衛隊について未だに憲法違反という一部国民や政党、マスコミがいますが、我々が若い時に比べればはるかに多くの国民、92パーセントの方が自衛隊を支持しています。それだけ期待が大きいのです。これからの時代何が起きても不思議でない時代の陸上自衛隊の幹部自衛官として個人の力を大いに高め、部隊の更なる高みを目指して力強い一歩を踏み出すことを期待し祝辞と致します。

令和2年1月24日

偕行社 理事 火箱芳文